

ケアの倫理と純粹贈与 —ケアのアマチュアリズムを讃えて—

「ケア」という言葉は、毎日のように目にしたり耳にする日常的な言葉になっている。このケアをケアたらしめているものとは一体なにか。もちろんこの問いへの答えは、発表全体での議論を通して為されるべきことであるが、ここでは仮説的に提示しておこう。シンプルなケアの例を考えてみよう。

喉が渴いた人に、一杯のお茶を供するという例である。日常的な営みともいえるが、ときとして最上のもてなしともなりうるし、場合によっては、その人に生きる活力と喜びをもたらしたり、深い慰めと温かい癒しをもたらしもするだろう。「一杯のお茶を供する」ことは真性のケアの一つであるといつてよい。この人のためにして「あげる」、「与える」というところに、ケアの中心があるといえないだろうか。このときお茶を供された人が、「ありがとう」と感謝の言葉を口にする。それはお茶を差し込んだ人を嬉しくさせるだろう。それだけでなく、この客人はさらに貨幣を差し込んだと考えてみよう。そうすると、そのとき、場にそぐわない不作法な事態が出現することになるだろう。ケアの「与える」ことにたいして、貨幣で返礼することはできないのだ。友人の親切な行いにたいしてお金を支払うものがないのと同じだ。誰もが知っているケアのこの性格に、ケアを職業としている人たちが直面している問題の根があるのではないだろうか。

発表では、「与える」という出来事に焦点をあて、贈与と交換という観点から、ケアが「与える」ものとはいったい何か、ケアにおける互酬性とはどのような事なのか、またケアを職業とするときその報酬はどのように理解すればよいのかについて考察し、「ケアの倫理」の新たな可能性を示したい。そしてケア本来の過剰で豊穡な力を解放したい。

話題提供：矢野 智司（京都大学）

日時 : 2013年3月7日（木）15時～18時
場所 : 奈良女子大学 コラボレーションセンター3F
Z306講義室（放送大学が入っている建物です）

ご興味のある方はどなたでもぜひご参加ください。

矢野智司：京都大学大学院教育学研究科教授。教育人間学。『自己変容という物語』（金子書房）『動物絵本をめぐる冒険』（勁草書房）『意味が躍動する生とは何か』（世織書房）『贈与と交換の教育学—漱石、賢治と純粹贈与のレッスン』（東京大学出版会）など著書多数。

問い合わせ先：文学部人間科学科 辻 敦子（内線：3333）